



『トクシマ・アンツアイガー』

第 25 号

徳 島 1915 年 9 月 19 日

祭りはその当日に祝わなくてはならない！われわれは今日、記念号である第 25 号の刊行を祝う。まことにめったにないお祭りである。めったにないというのは、25 号が出るだけですでに新聞の記念祭のきっかけになるということが、必ずしも普通のこととは言えないからだ。10 年目や 25 年目でお祝いがなされることならあるだろうが、われわれとしてはそんなに

長く待ちたくないのである。50号のお祝いさえ御免こうむりたい。われらのヒンデンプルクがロシア軍にこれからもここ数ヶ月同様の打撃を与えるならば、『トクシマ・アンツアイガー』がなお25週間続くことはなさそうだ。あつ、言わなきゃよかった。いずれにせよわれわれは、まもなくこの新聞の幸福な終わりが来ることを心底から望む。何といても銘記すべきは、『トクシマ・アンツアイガー』の終わりのときは同時にわれわれの解放のときになるはずだから、ということだ。それはそうと、こう言ってもよいと思うが、この新聞は今まで多くの友を獲得してきたし、総じて有益なものであることが実証されてきた。いずれわれわれが心ならずも美しい日本にとどまった思い出を新たにすることがあるならば、この新聞の価値はいつそう高まるだろう。また、時折きびしいお叱りを受けたということや、この新聞に時折気を悪くした読者もいたということは、『トクシマ・アンツアイガー』が大小の新聞すべてと共有する運命である。だが、それは悪いことではないのであり、それどころか時として非常に有益なのだ。八方美人になる術は、何といてもまだまだ発明されてはいないのだ。

われわれの新聞の最初の25号からなる立派な一巻のページをめくってみると、かなりの量の仕事ここに込められていることがわかる。この仕事を無私の心で援助してくれたすべての人々に、われわれはぜひとも感謝の念を表明したい。寄稿や新聞の筆写と印刷の仕事について、われわれがお礼を言わねばならない人はたくさんいる。

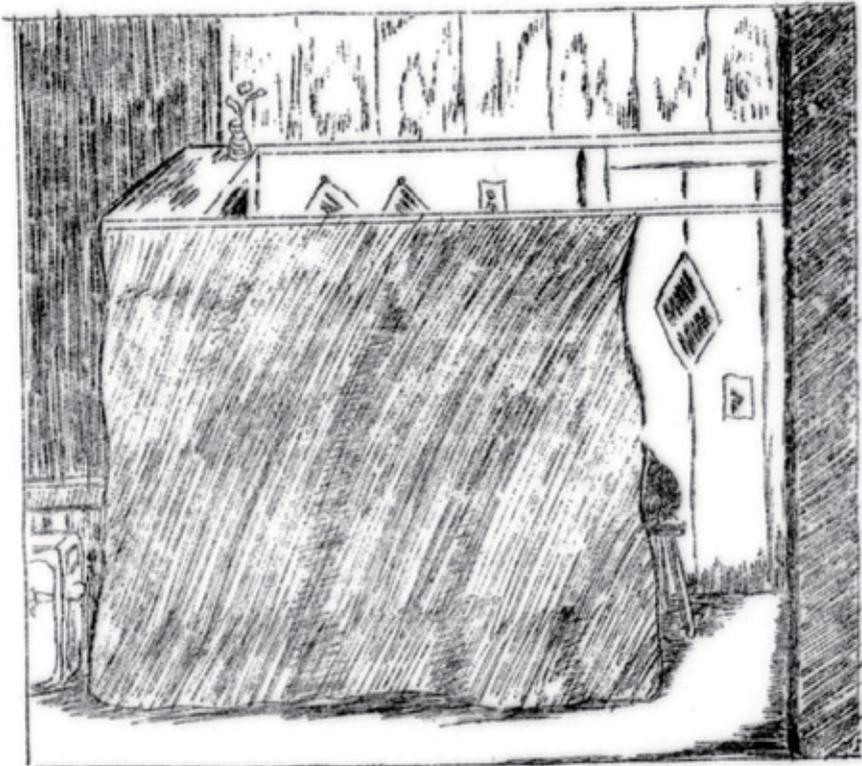
ページをめくって目につくことがもうひとつある。それは、われわれがつねに新聞をできるかぎり改善しようと努力したことだ。最近の番号と比べてみれば、第一号は実にみすばらしく見える。第二号ではもう紙質がよくなっており、それで両面印刷が可能になった。このときユーモア付録「シュピーゲル（鏡）」も加わったが、これは、われわれの日常生活のさまざまな出来事をこっけいな詩と愉快的イラストで批判するものだ。今ではわれわれの新聞の本質的な部分であるこの付録は、予備役一等砲兵ルッフのおかげでできたものだ。彼は、われわれの「印刷所所長」である一等砲



Bilder aus dem Betriebe
des „T. A.“

← Redaktion.

Unser Geschäftshaus
(von außen)



『トクシマ・アンツアイガー』情景
編集部（上）、われらの事業所（外観）（下）



凹版印刷術によるわれらの近代的輪転高速印刷
(堀井方式)

兵ヒューブナーと協力してカラー印刷の可能性を認識し、実現してくれたことによって、『トクシマ・アンツアイガー』に多大の功績がある。ヒューブナーはというと、『トクシマ・アンツアイガー』のために最初の瞬間から働いてくれて、ずっと「事業の支柱」のひとりである。彼の折り紙つきの手腕のおかげで、われわれは今とてもきれいな色刷りのスケッチ（「收容所の情景」を見てもらいたい）提供することができる。これは、彼がどんなに不完全な手段で仕事をせねばならないかを考えるとき、はじめて正しく判断できる業績なのだ。われわれの素描画家たち、二等砲兵シュミートと予備役一等砲兵ブーフマンは、芸術家にはありがちなことだが、たいいてい彼らの作品の再現にさいしてなかなか OK を出してくれない。というのも、彼らの原画の微妙なニュアンスを、今日言うところの「余すところ

なく引き出す」ことは、われわれにはやはり不可能なことだからだ。

やがてわれわれは印刷のスタッフを増やさなければならなくなり、事実また、一等砲兵ヘーネケという熱心で腕利きの協力者を見つけた。

新聞の外観にとって少なくとも印刷と同じくらい重要なのは、われわれの作業の中で植字の代わりとなっている書き写し¹である。この困難で手間のかかる仕事を何ヶ月にもわたってまったくひとりでこなしたのは、一等砲兵ケラーだった。彼もまた、『トクシマ・アンツアイガー』という建物の最も丈夫な柱のひとつに数え入れられる。ようやく最近になって、彼の代わりが見つかり、彼は「営業所所長」に昇進した。書き写しのために喜んで助力を申し出てくれたのは9人で、今は一等砲兵アウアーと二等砲兵ピータク、二等砲兵ラングロックがこの仕事を分け合っている。われわれの新聞が技術的な点でますます完成度を高めることができたのは、この協力者たち全員のおかげである。

内容に関して言うと、全体としてわれわれは第一号で立てた計画に従った。われわれが決定した唯一の変更は、電信情報を張り紙でのみ告知し、予告とは違って新聞そのものでは公表しなかったことである。これによって、いつも日本の新聞が来たあとすぐにニュースを掲示することができた。もっともこれは、日本の新聞の電信による最新情報を毎日翻訳している予備役副曹長ヴェルナー氏の好意によってのみ、可能となっている。この点で、特にお礼を申し上げたい。ありがたいことに、祖国の勇敢なわが軍とその天才的な指導者たちのおかげで、彼は多くのすばらしいドイツの勝利の知らせを翻訳することができた。

われわれは、このような状況がこれからも同様に続くことを心から希望する。

編集部

1 謄写版印刷におけるいわゆる「ガリ切り」。蠟をしみこませた原紙に鉄筆で原稿を書き写すこと。この蠟原紙の下に紙を置き、上からインクをつけたローラーをこるがすと、蠟が除去された部分からインクが染み出て印刷できる。

今日の号でわれわれは、『トクシマ・アンツァイガー』の第一巻を完結させる。新たに加わった読者のために、われわれは新しい巻をいくつかの新しい記事ではじめるつもりである。今は購入代金の大部分が支払われており、将来のために定期的な補助金が寄付されたので、新聞の価格を第 26 号から 5 銭に値下げすることが可能となった。

日本の歴史（23・完）

日露戦争後まもなく、朝鮮はそれまで少なくとも形式的には保っていた独立を失った。日本の統監府²がおかれ、朝鮮の外国との交渉はすべて日本の外務省によって指導された。独立を失ったことにより、その後若干の動乱が惹き起こされたが、あらゆる点で遅れていたこの国には、有効な抵抗をおこなうための原動力がなかった。

日本は、驚くべき速さで、開国後に近代の諸々の成果をわがものにするのができた。その外面的な成功により、日本は大国としての地位を手に入れた。現在の戦争によって示されたのは、この国がその力をさらに拡大して、中国の軍事的無力を利用してこの巨大な国を自己の占有的な領分にするのにはいかに努力を払っているかということである。たしかにこの意図は達成できなかったが、日本の今後の政治目的も、東洋における唯一の大国として、東洋の運命をみずからの手でのみ導いてゆき、ヨーロッパの影響を排除することであろう。中国が強くなることによってのみ、日本の大膨張を終わらせることができる。

外での諸々の成功とは裏腹に、まだ数多くの未解決の内なる課題がある。日本は外交政策によって、これらの課題に向き合うことを避けているかのように思えるほどだ。少し前まで農業と家内工業しか知らなかったこの国の工業化が進展することによって、さまざまな社会問題が前面に出てきた。

2 1905 年設置。韓国併合後の 1910 年に総督府となる。

対外的に強国としての地位を今後も維持してゆくには、すべての国内問題をうまく解決することが前提条件となる。さしあたり、政府は国内の諸問題に主として取り組まなければならないだろう。

プリュショウ海軍中尉は、『華徳日報』によれば、イギリス軍の捕虜収容所から逃亡したのち、無事キールに着いた。

このところわれわれのコーラス・クラブは急激に会員が増え、今や 53 名を下らないメンバーがいる。こんなに多くの人々が加入を決めてくれたことは、とても感謝すべきことだ。人数の増えた合唱団の公演を、われわれはわくわくして待ち望んでいる。

懸賞つきトランプ

喜ばしいことに、われわれが公示したトランプ競技に、非常に多くの参加申し込みがあった。スカートには 33 名の、ブリッジには 24 名の参加者がいる。抽選によって、まずスカートが、次にブリッジがおこなわれることになった。競技は今月 20 日の月曜日、朝 9 時にはじまる。

第 19 回コンサート 1915 年 9 月 19 日

プログラム

1. 「旧友」 行進曲 タイケ
2. オペラ『ファウスト』より「大幻想曲」 グノー
3. オペラ『タンホイザー』より「宵の明星の歌」 R. ワーグナー
4. バレエ『コッペリア』より「間奏曲」 ドリーブ
5. 笑劇『号外』より「グレーの軍服」 W. コロー

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの宵の明星の歌

『タンホイザー』より

死の予感のように一夕闇は国々を覆い
谷を包む一黒ずんだ衣裳で。
あの高みを求める魂は、夜の戦慄を
くぐってゆく飛翔に憂いを感じる。

そこに最も好ましい星であるおまえは輝き、
その穏やかな光を遠くへと放つ。
夜の薄闇をおまえの線條は分かち、
谷の出口を親切にも示してくれる。

おお、わがやさしき宵の明星よ。
私はいつもよろこんでおまえに挨拶する。
彼女がお前を通り過ぎるときには、
誠実なわが心からの挨拶を伝えよ。
彼女がこの地上の谷を飛び去り
天上で至福の天使となるときには。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 43 問解答

1. Df4 - g5 任意の手
2. D, T, L いずれにても詰み

第 44 問解答

1. Lh5 - f3 Tc4 x e4
2. Dg7 - d4 + Te4 x d4
3. Td6 - c6 詰み

第 44 問その他の解答

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. Kc5 x d6 | 1. e6 - e5 |
| 2. e4 - e5 + Kd6 - c5 | 2. Dg7 - a7+ Kc5 x d6 |
| 3. Dg7 - a7 詰み | 3. Th2 - h6 詰み |

これ以外の変化も容易

正解者

第 43 問：ヨーゼフ・ヴェーバー

第 45 問

白：Kg2, Dd1, Tc4, e4, Bb2, d3.
黒：Kd5, Td6, La6, Bb5, c5, c6, g6.
2 手詰め

第 46 問

白：Ka1, Dd1, Tc4, e4, Sc6, Ba2.
黒：Kd5, Tf1, h5, Le1, Sc8, h8, Ba4, a5, b6, d2, d6,
f2, g4, g5.
3 手詰め

青 島 (完)

町の中心と東部新別荘地区のあいだの森に覆われた丘の南斜面にある総督府では、もちろん真剣な様子で額に皺をよせた将校たちが、入ってきた急報を、ふだんよりも性急に開けていた。7月30日には、上海のドイツ人商人たちが、青島の仕事仲間に電報を打ったが、それを人々は首を振りながら回し読みした。遠い祖国への憂慮によって、興奮した人々はクラブや青島湾に面したカイザー・ヴィルヘルム通りに集まってきた。ここは、徳華高等学堂の窓から西側には幹線道路が見え、ドイツ・アジア銀行の窓からは東側にアルコナ湾全体と、黄海に張り出した外港が見えるが、青島の人々はニュースを仕入れるためにここに来る。8月1日の昼12時から1時までのあいだ、ここに最初に出された赤い張り紙のまわりに人々が駆け寄ってきた。「皇帝にして国王陛下は、陸海軍の動員を命じた。」ドイツ人たちの姿勢が改まった。「やはり来たか。」中国人たちは、印刷された言葉を翻訳・解説してもらい、ほほ笑みながら肩をそびやかして立ち去る。「ならず者が殴り合い、仲直りする。ドイツとロシア、それから多分フランスとの戦争が、われわれに何の関係がある」というわけだ。

アウグスタ・ヴィクトリア湾と青島湾のあいだで黄海に突き出し、新しい別荘の町がある岬の爪に当たる部分にカジノがある。ここでは将校たちが帽子をとり、ナイフとフォークを置いて短剣とサーベルを身につけた。電話連絡は彼らに喜びよりもむしろ悲しみをもたらしていた。祖国の国境では、おそらく今、比類ない歴史の新しい一章の序がもう書かれていただろう。この将校たちは、辺鄙なところで不名誉な傍観者の立場に甘んじなければならなかった。ロシア軍もフランス軍も、青島まであえて攻めては来ないだろうから。広場と堡壘を計画的に補強するために、彼らは掲示板の新しい赤い張り紙を見た。租借地の総督、海軍大佐マイアー＝ヴァルデック閣下は、予備役兵とともに陸海軍の第一・第二後備役兵を召集した。同時に彼は、約450名の東アジア海軍分遣隊に、天津と北京から鉄道で青島

まで来るように命じた。

まもなく、補強のために、最初の車列と食糧・弾薬の輸送隊が街路をがらがらと通り過ぎていった。外国人たちは、トランクに荷物を詰めたが、出発を促す総督府の勧告も指示も出されなかったので、とどまった。イギリス人とアメリカ人でさえ、青島の平和を妨げる敵はいないと信じていた。

8月2日の朝、すでに多数の苦力（クーリー）が、町の東部にある用地で堡壘を築いていた。午後になると、総督の不安はなくなった。補助巡洋艦としての使用が予定されている汽船「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」は、数日前に出港していた。ドイツ政府からの急報は、フランスとイギリスとも戦争になりそうだということを知っていた。それで、この船が敵の餌食になるのではないかと懸念されていたのだが、ついに夕方頃に灯台からこの汽船を視認したとの報告があった。「アイテル・フリードリヒ」の艤装がはじまり、四日後にはこの船の成功と榮譽に満ちた航海が始まった。

8月4日、青島は戦争に向けて目覚めた。フランスもわれわれに戦いを挑んだというニュースとともに、住民たちが聞いたのは、海軍分遣隊と多くの予備役兵たちが北京と天津からやってくるということだった。老いも若きも駅に向かって歩いた。「フリードリヒ王、われらが王にして支配者。彼はすべての兵たちに武器を取るよう呼びかけた」という曲が、到着する人々に向けて海兵大隊の軍楽隊から鳴り響いた。万歳を叫びすぎて声が嘎れながらも、青島の人々はやってきた部隊や予備兵たちを取り囲み、さまざまな軍歌を歌いながら彼らに付き添って兵営まで送っていった。苦力たちは到着した兵たちの箱やトランクを人力車に載せて後に続いた。

昼になると、われわれの歌はますます大きく、喜ばしげに街路に響き渡った。掲示板には、イギリスが帝国に宣戦を布告したと書かれていた。この知らせによって、兵営でも前衛陣地にいる部隊でも、なかなか鳴りやまない歓声が起った。塹壕掘りの作業では、水兵や海兵が戦略家のように指図していた。イギリス軍は南と海から、ロシア軍は鉄道で北からやってくる

るだろう。どちらも頭から血を流しながら、帰って行くだろう。将校たちの確信によれば、成功の見込みをもってわれわれのアジアの拠点を攻撃できるのは、ひとつの国、日本だけであった。……

青島の町はからっぽになった。水兵は、要塞か船上にいた。海兵は、堡壘か租借地の境界にある哨所にいた。夕方になって、総督が、総司令部と宿舎を青島の東部、つまり堡壘の背後にあるビスマルク兵営に移したとき、これから始まる戦いは深刻になるのではないかという最初の予感が町では感じられた。総督は、町と住民を背にして、兵士たちに混じって目を前方のこれからの戦いの場へと向けたのである。青島とその市民たちのもとを去り、彼はもはや官吏、総督としてではなく、ただ兵士、指揮官として、攻囲の日々を過ごさねばならなかった。彼は自分に従うドイツ人たちを知っていた。そしてすべてのドイツ人は、ドイツ人として戦う名誉を僅かでも犠牲にするくらいなら、自分の住処の瓦礫の下に埋められたいという決然たる意志に鼓舞されていた。青島の人々のために最後の一弾まで戦いながら、総督は一戦争の歴史においておそらく唯一の事例であろうが一彼みずからが、あるいは代理を通じて、住民たちに秩序を守り、耐え抜くことを言葉や文書でもって求める必要がただの一度もなかった。総督は、自己の義務を意識しながら、彼に従う各人がドイツ人として自分の義務を知り、実行することに疑いを抱かなかった。昼に掲示板の張り紙が新しい情報を知らせたとき、市民たちは総督のことをはじめて聞いた。

この8月6日の朝、港も空っぽだった。巡洋艦「エムデン」と砲艦「ヤーグアル」、水雷艇「S 90」は姿を消していた。投錨していたのは、しばらくのちの危険と苦境に英雄的な勇敢さを示し、誠実であった同盟国の船、オーストリア・ハンガリーの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」だけである。ドックで武装をはずされてまどろんでいたのは、戦闘にはもはや使用できない小型砲艦「コルモラン」「イルティス」「ティーガー」「ルクス」である。「私は不安と重苦しい孤立感に襲われました」と、攻囲について語る女性は言う。「私たちはすでに、南の海に向けて航海している巡洋艦

の艦隊にいる知り合いの人々のことが気がかりだったからです。」しかし、夕方ごろ、三隻からなる青島の小さな艦隊は港に戻ってきた。「帝国軍艦エムデン」は、ロシアの義勇艦隊の汽船「リヤザン」を拿捕して連れてきた。このロシア船には、補助巡洋艦としての武装のさいに、「コルモラン」の砲とともにこの砲艦の由緒正しい名が与えられた。ドイツの乗組員たちはこの船に榮譽を与えることになった。しかし、「エムデン」はわずかな時間しか港にいなかった。次の日の朝日が東アジアのドロミテと呼ばれる労山のジグザグの稜線を赤く照らすより前に、この艦は不滅の航海に出ているのである。

完

「エムデン」上陸隊体験記（11・完）

すべては順調だったが、「マルコマンニア」の石炭はもうあまりなかった。ある晩、われわれはミサのときに言った。「今足りないのは、上質のカーディフ産石炭 500 トンを積んだ汽船だけだ。」次の晩、われわれは汽船をつかまえた。できたばかりでイギリスから香港への試運転にチャーターされていた「ビューレスク」である。その後「リベラ」「フォイル」「グランド・ポンラベル」「ベンモーア」「トロワイヤン」「エクスフォード」「グリスフォール」「ザンクト・エグバート」「チルカナ」が続いた。たいていは沈めたが、石炭船だけは同行させた。「エグバート」については、乗客と乗組員を乗せて解放した。われわれは、「マルコマンニア」と別れたが、それはこの船に石炭がなかったからである。この船はのちにイギリス人に拿捕されたが、イギリス船に関するすべての書類を載せていた。これらすべては 10 月 20 日までに起こったことである。それからわれわれは南に進路をとり、コロンボの南西にあるデオガジアに向かった。ラッカディヴ諸島

の南のデオガジアで、イギリス人たちが乗り込んできた。彼らは周囲から孤立した農場経営者たちで、三ヶ月に一度だけスクーターを使って島の外と交渉を持っているのである。この人々は戦争のことを何も知らず、われわれの船をイギリスの軍艦と考え、モーターボートの修理を依頼してきた。彼らは艦長に豚を一頭プレゼントした。われわれは、黙って彼らをミサに招待した。そこで彼らはだしぬけに、カイザーの肖像を目にすることとなった。びっくり仰天である。「ドイツの船だ！」われわれはなおも黙っていた。「あなた方の船は、なぜこんなに汚れているのですか。」われわれは肩をそびやかした。「われわれの手紙を運んでくませんか。」—「残念ながら無理です。どこの港に入るか、決めていませんので。」そこで彼らは船を下りた。われわれは、彼らに戦争については一言も言わなかった。

それからミニコに向かったが、そこでもわれわれは二隻沈めた。一隻の船長は言った。「なぜミニコの北に行ってみないのか。あそこなら今多くの船がいるのに。」翌日、北方で三隻の汽船を見つけたが、一隻は待望のカーディフ産石炭を積んでいた。拿捕された船について報じているイギリスの新聞から、われわれはきびしい追跡を受けていることが改めてわかった。解放された火夫たちが、いろいろとしゃべっていたのである。われわれの追跡者たちは、南の方でも中継地点を持っているにちがいがなかった。ペナンは格好の場所だった。そこには二隻のフランス巡洋艦がいると考えられた。そこで、ある夜われわれは出発した。28日、われわれは役に立つ四番目の煙突を付けた。(ちなみに、ミュッケの発案である。)これにより、われわれの艦はイギリスかフランスの艦と間違われた。ペナン港は海峡の途中にあり、たどり着くのはむずかしい。夜は無理で、ちょうど夜明けのときでなければならなかった。かなりの速度で音をたてず、灯火もつけずにわれわれは入り口に向かった。見張りをしていた水雷艇は、ひっそりと眠っていた。その小さな光のそばをわれわれは通り過ぎた。港内には、灯火を落とした黒い艦影がひとつ停泊しており、これは軍艦のようだった。しかし求めているフランス艦ではない。そこに、縁に三つの灯火のある艦影が

近づいてきた。シルエットが識別できた。—まちがいない。ロシアの「シエムチュグ」だった。この艦はここに停泊し、すっかり眠りこんでいた。見張りは見られない。おかげで仕事が楽になった。港が狭いので、かなり近距離にならざるをえず、最初の魚雷は400メートルの距離で発射した。するともちろん眠っていた艦の上で動きがあった。すぐに水夫室に、毎回五発の榴弾で砲火を浴びせた。明るい火の光が生じ、それから燃える光輪のようなものが発した。四回目の砲撃のあと、炎が噴きあげた。近距離すぎで一発目の魚雷は艦底を通過しただけだったが、別の方向から放った二発目は下方にそれることなく前の煙突の前方に命中した。爆発の位置からそれと知れたのである。20秒後にはもう艦影はあとかたもなかった。敵は六発ほど撃ってきただけだった。しかし、今やわれわれからは見えない別の船から撃ってきた。それはフランス艦「ディプロイユ」で、われわれはすぐそちらに向けて回頭した。数分後、入港してくる駆逐艦のことが告げられた。この船に狭い港内で見つかってはいけない。そうなればやられてしまう。しかし、それはフランス艦に似ているように見える汽船にすぎず、これはすぐに商船の旗を掲げて陸の方に向かった。続いてすぐに第二の船の知らせがあった。今回はフランスの水雷艇「ムスケー」だった。まっすぐわれわれに向かってくる。私にはなぜかわからなかった。砲声が聞こえたはずだからだ。あとで海から引き上げた将校によれば、このときはじめてわれわれがドイツ艦であることに気づいたという。しかし、このときのフランス艇の行動はあつぱれで、交戦を挑み、撃ってきた。だが、三斉射で片づけた。二つの艦艇との戦いは半時間で完了した。水雷艇の艇長は第一斉射で両足を失った。一部の乗組員が船から海に飛び込むのを見て、彼は叫んだ。「私を船にしばりつけてくれ。もう生きていたくない。フランス人が自分の船を捨てるとは。」実際彼は、勇敢な艇長としてマストに身をしばりつけて沈んでいった。それからわれわれは、30人の重傷者を海から引き上げたが、3人はすぐに死んだ。われわれは三色旗を縫い合わせ、死者たちをそれにくるんで、船乗りの榮譽を表す三発の礼砲とともに海に沈

めた。これがわれわれの唯一の海戦だった。第二の海戦を、私はもう体験することはなかった。

ミュッケは、あるときは将校として、あるときは芸術家のように、生き生きと具体的に語るのだが、どうしても冒険談のような印象はぬぐえない。しかし、「エムデン」の破滅に話が及ぶときには、それとは違う調子で、次のように語った。

11月9日、ココス島のキーリングで無線電信所を破壊するために、私は『エムデン』から離れた。50名の部下を引き連れ、4丁の機関銃と約30丁の小銃を携えていた。無線装置を壊したとき、それはまだ「警戒せよ。『エムデン』接近」という報を流していた。電信員たちは言った。「ありがたいね。このところ夜も昼も缶づめだったんだ。」突如、エムデンから「作業を急げ！」という信号があった。われわれは荷物をまとめたが、それに続いてサイレンが鳴った。橋に急ぐと、聖アンナの旗が揚がるのが見えた。「錨を上げよ」という意味である。われわれは大急ぎでボートに乗ったが、「エムデン」艦上ではもう斜めの桁に旗が揚がる。マスト先端に旗が掲げられ、右舷の砲が火を吐く。敵艦は島陰に隠れて見えないが、その砲弾が上げる水柱は見える。「エムデン」のあとを追うことは考えられない。「エムデン」は20ノット、こちらの艦載蒸気ボートは4ノットである。それで私は陸に引き返し、旗をあげて戦時におけるドイツの権利を宣言し、すべての武器を押収し、浜に機関銃を設置して敵の上陸に備えた。それから私は海戦を観察するために走り帰った。敵艦は、水柱からすると15センチ砲を持っているようなので、「エムデン」よりも大きかった。射撃は速かったが狙いは悪かった。敵艦は「シドニー」であった。

「ところでご存知ですか。」と彼は突然話の途中で尋ねる。「『シドニー』がその後どうなったか。例えばダーダネルスで。」そして彼の艦を葬った敵に対する憎しみが、一瞬のあいだ青い目の中にみとめられた。彼は続ける。「『エムデン』は、浜辺で海戦のはじまりを見ることができたイギリス人たちによれば、早々に動きを封じられてしまったそうです。」

前の方の煙突は、艦の上にかぶさるように傾いていた。「エムデン」は、反航戦と魚雷発射に移ろうとしたが、すでに艦尾に激しい火災が起っていた。メインマストのうしろには数発の榴弾が命中し、炎が高く上がっているのが見えた。それから私は武器の設置作業を仕上げなければならなかったもので、反航戦になったのか同航戦になったのかは分からない。その後屋根に登って観察した。そのとき、「エムデン」は最初と同じように海上に止まっていた。四千か五千メートルの距離で、燃えていた。再び敵に向きを変えたとき、マストが砲撃で倒された。敵艦に損害はなさそうに見えたが、数条の煙から命中弾があったことが知れた。それから「エムデン」は北に進路をとり、敵艦も続いた。私はそこにたたずむしかなく、歯ぎしりしながら思った。「くそっ。『エムデン』が燃えている。なのに私は艦上にいない。」後に続いて屋根に登ってきたイギリス人が近づいてきて丁寧に挨拶し、尋ねた。「船長。いっしょにテニスをしませんか。」二隻の船は、戦闘を交えながら水平線に消えた。「エムデン」にとって戦いは不幸な結末になりそうだ。また、キーリング島への敵の上陸も、少なくとも負傷者の陸揚げと食糧供給のためにありそうだ。さらに、イギリス人の言うところでは、近くに他の敵艦もいるということだったので、弾薬不足のためすぐに降伏しなければならなくなるにちがいないと、私は考えた。しかし、私と部下たちは、何としてもイギリスの捕虜にはなりたくなかった。あれこれと考えていると、まただしぬけにマストが水平線のこちらに現れた。「エムデン」は東に向けてのろのろと航行している。突然敵艦は非常な高速でとびだしてきて、どうやら「エムデン」に接近しているらしい。「エムデン」の大きさがほとんど敵艦と同じになったその時、高く白い柱が敵艦の黒い煙の中に現れた。それは魚雷だった。二隻の船が互いに退き、次第に離れてゆくのが見え、ついには暗闇の中に見えなくなった。戦いは10時間続いていた。

完

われわれの記念号のために、次のような祝辞が届いた。



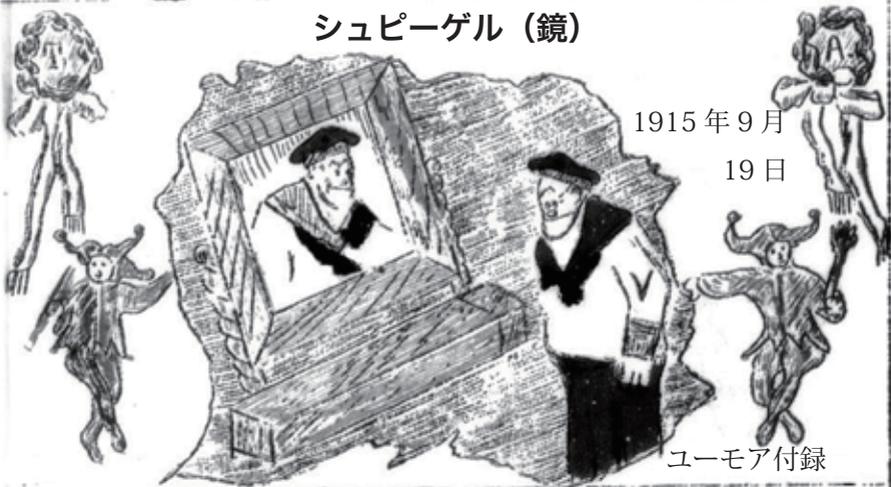
『トクシマ・アンツアイガー』25号に、心からのお祝いを、そしてこの新聞の誠実な協力者たちに、収容所の名において多大の感謝を申し上げる。

(署名) デュムラー大尉

シュピーゲル (鏡)

1915年9月
19日

ユーモア付録



トクシマ・アン
ツァイ
ガ一の

おじきんより

この新聞の読者に

ごきげんよう。
昔からの誠実さで
私は今日、また新たに
記念日を迎える。

25号が過ぎ去った。
われらが皆望むのは
二倍の数字には
けっして会わぬこと。

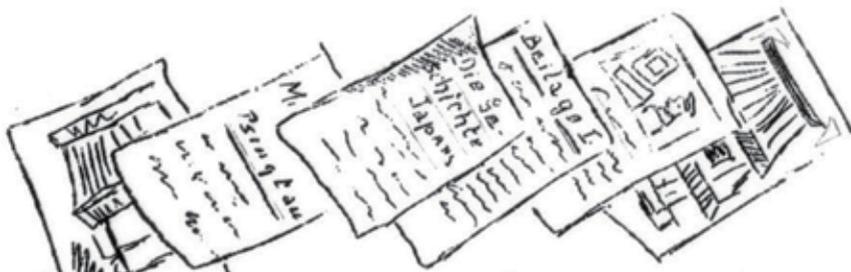


厳肅、快活、機智に教訓、
私は喜んで提供してきた。
すべての作業の成果は
予約購読者の数でわかる。

最初の頃を思い起こすと、
仕事が出来上がったとき、
正直言って、どれほどの
苦心と労苦だったことか。

すべてのはじまりは難しいと
昔から言うではないか。
だが、肝要なのは一人一人に
記念の品を贈ることだった。

これからの人生のためにも
諸君に思い出をあげたかった。
昔ながらのドイツのやり方で
諸君が家族との円居の中、
愛する者たちに囲まれて



それまでの人生を思い起こし
昔の思い出に浸るときのため。
その頃、祖国から遠いこの異郷で
諸君はドイツの名誉と力のため
哨所に立って戦うことができた。
その頃、諸君は長い不安な日々
に意気消沈してしまいそうだった。
だが、悲しみの暗い夜ののち
ようやく朝がやってきた。—
諸君がこのように思い返し、
この新聞に目を向けるとき、



かつて諸君がその目を見た
多くのことがまたよみがえり、
戦友の連帯のきずなは
強められ、新たな支えとなる。

もうこれ以上とどまりたくない。
諸君との別れはつらいだろう。
だがそれが幸いとならんことを。
50号記念は御免こうむりたい。
諸君がさらに心やさしくも
思い出を私に贈るつもりなら、

感謝したい。
何千倍にもなってほしい。
われらに幾多の喜びを
くれた
この事業は

定期購読者が

大きくなり栄えよ。

そして日曜日には

またやってくる。

トクシマ・
アンツアイガーの
おじさんが。

